研究分野	資源評価	部名	漁業開発部
研究課題名	日本周辺高度回遊性魚類資源調査		
予算区分	独法委託		
試験研究実施年度・研究期間	H.１３ ～ H.１７		
担当	植村 康		
協力・分担関係	(独)遠洋水産研究所		

〈目的〉

日本が国際機関の高度回遊性魚類の保存・管理に協力し、当該資源の安定的な利用のため、資源の科学的データを完備するための調査の一環である。独立行政法人水産総合研究センターが都道府県、大学、民間団体に委託する調査の一部である。青森県のマグロ類、サメ類の漁獲関連データ集計・解析を行うものである。

〈試験研究方法〉調査市場のマグロ類、サメ類の水揚伝票から調査項目を抽出して取りまとめた。

調査項目：漁獲月日、漁獲重量、規格

調査市場：マグロ類

日本海沿岸　：①岩崎、②深浦

津軽海峡沿岸：③三厩、④大間

太平洋沿岸　：⑤尻労、⑥六ヶ所海水、⑦八戸みなと漁協・八戸魚市場

サメ類

太平洋沿岸　：①八戸みなと漁協・八戸魚市場

調査時期：平成16年1月から6月までのデータを平成16年7月に現地調査して、取りまとめ、データ取りまとめ機関の日本エヌ・ユー・エス(JANUS)にデータを報告した。同様に7月から9月を10月に、10月から12月を平成17年1月に取りまとめ報告した。

〈結果の概要・要約〉

- 青森県で漁獲されるマグロ類の殆どがクロマグロで体重20kg.以上をマグロ、以下をメジと呼称する地区が多い。
- クロマグロは青森県全域で釣り（一本釣り、曳釣、延縄）及び定置網（大型、小型）で漁獲され、地域で重要な魚種となっている。
- 釣りが行われているのは日本海及び津軽海峡沿岸である。
- マグロ類は他にメカジキ、マカジキ、キハダが少量漁獲された。
- サメ類はアブラツノザメ、ネズミザメ、ホシザメが漁獲され、漁法は底曳網であった。

〈主要成果の具体的なデータ〉

- クロマグロは7市場で、水揚げ全量の10,843尾の体重データを取りまとめた。
- 7市場のクロマグロは441トンで前年の356トンを大幅に上回った。津軽海峡地区で前年から165トン増加した影響が大きかった。1992年の調査開始以来最も多い漁獲量であった。
- 大間では体重100ｋｇを超える個体の漁獲量が83%を占め、「大間の一本釣り」として評価され、中央市場では高値で取引されている。

- クロマグロ漁獲量の順位は大間 215 トン、三厩 98 トン、尻労 50 トン、深浦 32 トン、岩崎 41 トンであった。
- クロマグロ漁獲尾数の順位は、尻労 2,754 尾、大間 2,527 尾、三厩 2,011 尾、岩崎 1,698 尾、深浦 1,518 尾であった。
- クロマグロ体長（尾叉長）測定は深浦、三厩、大間の 3 地区で行い、それぞれ 81 尾、1,935 尾、821 尾の計 2,837 尾の体長・体重データが得られた。
- 年令別平均体重から推定した年令分けでは、クロマグロ漁獲量には 3～4 令と 9 令以上の 2 つの山がみられた。漁獲尾数は 4 令以下が 83%を占め、成熟年令の 5 令になる前の漁獲が大部分であった。
- クロマグロは 6 月から 12 月が主要な水揚げの時期であった。定置網漁業は 6～8 月に、釣りは 9～12 月に漁獲が集中していた。
- アブラツノザメは箱入れ尾数から 44,765 尾の体重を推定した。これは漁獲量 142 トンの 70%にあたる。アブラツノザメの漁期は周年であったが、11 月から翌年 2 月に多く漁獲された。
- 漁獲されるアブラツノザメの体重は 20kg までみられるが、体重 1～3kg の漁獲が殆どを占めていた。
- アブラツノザメの漁獲量は 142 トンと、前年の 158 トンから横這いであった。
- サメ類は他にネズミザメ 10 トン、ホシザメ 2 トンの漁獲があった。

〈今後の問題点〉

- クロマグロの年令組成を正確にするため、体長測定数や調査対象の市場を増やす必要がある。
- 委託先の遠洋水研の要求データのみでなく、青森県で必要なデータについて検討し、収集解析を行い、青森県のクロマグロ漁業者により有効な調査にしていく必要がある。

〈次年度の具体的計画〉

平成 16 年度と同様の内容である。

〈結果の発表・活用状況等〉

- 平成 17 年 2 月に日本周辺高度回遊性魚類資源調査委託事業報告会で発表した。
- 平成 16 年度報告書は平成 17 年 3 月 JANUS で印刷。

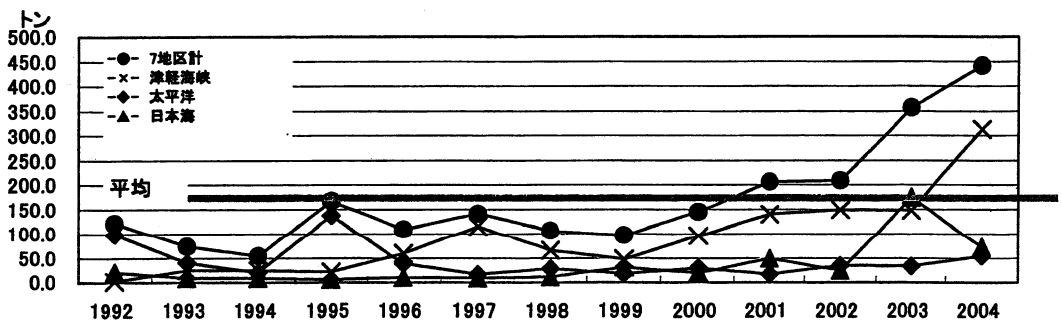

図1 クロマグロ水揚げ量推移　青森県